

森有礼の道德観

一文相期の德育政策面から

廣 嶋 龍太郎

緒言

森有礼は、近代教育の黎明期を生きた日本の初代文部大臣である。近代教育、特に学校教育の基礎を築いた人物として評価される森は、文相としてその政策面で数々の成果を挙げ、日本の教育を牽引してきたとされている。各学校令の制定や、兵式体操の導入など、多くの政策を達成した森であるが、その成立過程において、様々な人物との軋轢を生んできたことも、人物研究の観点から明らかになっている。特に、後に教育勅語の起草に大きくかかわった儒学者・元田永孚との確執は有名であるが、森に対する支持者であった伊藤博文などとも、しばしば衝突することがあったことなどからも、妥協を許さぬ人間性が伺える。これまで多くの人物研究の先達が明らかにしてきたように、森は進歩的かつ合理的な人間であったと考えられる。

森有礼は、「知育・德育・体育」の三要素を教育の目標に掲げ、文部行政を執り行った。この目標は今日文部科学省においても変わらず存在し、百二十年を超える一貫した教育の柱となってきたことがわかる。森有礼の人物研究を行う際に、この三要素は避けて通ることはできず、それゆえそれぞれの観点から、包括的に知育論、德育論、体育論を構成し、森有礼の求めた教育論に迫ることが、ひとつの研究手法であるように考えられる。

筆者は既に修士論文において、森有礼の身体観についての考察を行った。これについては、今後も体育論の研究として進めていくつもりである。そして、最終的な目的地として森有礼の教育論を考察するために、次の研究は森の道德観と德育論であると考えている。そのため、今回は文相期の森が行った德育政策について、その道德観に迫るということを一つの目的に掲げてみたい。具体的には、既に先行研究で触れられている『倫理書』等を中心とした道德観に加え、過去に身体観で扱った兵式体操からのアプローチを行うことで、今までとは違った角度の考察ができるものと考えている。

百二十年を越える文部省（現・文部科学省）の歴史において、森有礼の位置付けは決して軽いものではない。森有礼の再考は一部の歴史学者の間でのみ行われるものであってはならないと考える。今日、教員は目の前の課題に迫られてゆとりをなくして久しく、行政から課せられた研修課題や各校ごとの教育目標を追求することだけで精一杯になりつつある。また、相次ぐ教育問題の解決は即効性のある政策に求められ、対処療法的な対応を急ぐあまり、抜本的な思想や歴史の認識にまで手が回らないのが現状である。一方で、長崎の女兒児童による同級生の殺害事件を例にとるまでもなく、子どもたちの心に関する問題は膨れ上がる一方である。

このような現状であるからこそ、教員や教育関係者の間で、更なる森有礼の再考が行われることの必要を切に感じつつ、これからの研究がその改善の一助になることを願って考察を行うこととしたい。

第一章 森有礼に至る徳育

今日における道德教育は、多くが学校教育の中で行われているものと認識されている。事実、学習指導要領の中には「道德」の時間が規定され、学校教育では道德活動を行うことが定められている。道德の捉え方に関する是非とは別に、道德教育は学校制度の中で進められてきた。無論、学校教育以前の道德教育も存在するが、今日的な道德と森有礼との関わりを示すために、ここでは学校教育に論点を絞って言及する。森有礼が道德教育に関わったのは、学校教育の中で道德内容が扱われる黎明期である。彼が日本の道德教育において何を求めていたかを位置づけるために、まずは道德教育についての概説を述べておく。

第一節 徳育史概説

明治以前の道德教育

学校という全国統一の規格としての教育が導入されたのは、明治初期に制定された学制においてである。それ以前の江戸時代までは統一した教育体制は存在しなかったが、武士教育では藩校や私塾が、庶民教育では寺子屋などが道德教育を担ってきた¹。

武士教育では封建制度の担い手として、儒教教育を軸とした道德律が求められ、庶民教育では『和俗童子訓』などに代表されるような生活教訓が求められた。それぞれの教育内容の質に関しては、260年を超える太平の時代によって体系化され向上していったと考えられる。しかし、身分制度や教育体系の違いから、組織的・統一的な道德教育は成し得なかったと見るのが妥当である。

学制の制定

1872年（明治5年）の学制制定により、日本に近代的教育制度が導入され、全国的な学校教育が展開される契機となった。学制は欧州近代思想の強い影響を受けており、欧米先進諸国の知識・技術・制度を摂取する目的があった。ここでは全国を8つの学区に分け、小学校（下等小学校、上等小学校）、中学校（下等中学校、上等中学校）、大学の設置と、そこに設置される教科が提示された。

学制における道德教育で特徴的なのは、教科として修身科が設置されたことである。小学校において修身、中学校において修身学が規定されており、一貫して修身を教授しようとしたことが分かる。なお、大学における道德教育の規定は見当たらない。

江戸時代から重視されてきた綴字や国語が上位に書かれていることに対し、修身は中盤から後半にかけて書かれている。また、後に制定される教育令、改正教育令、学校令の時数と比べても少ないことから、他の教科に比較して修身が軽視されていたとの見解がなされている。

この当時の修身は、「修身口授」とされるように、教科書を使用しつつ教師が口授すると

いう形を取っていたが、教科書自体が不足し、中には外国の翻訳等が多く存在するなど、混乱した時期でもあった。いずれにせよ、学制下で、道德教育に関する修身科という明確な独自の教科が成立²したのは事実である。

教育令の制定

1879年（明治12年）、学制に代わる教育令が公布され、就学時間の短縮、就学義務の緩和、私立学校設置の自由化をはじめとする教育制度の転換が行われた。学制がフランスを中心とした欧米先進国の教育制度の導入であったのに対し、教育令はアメリカ自由主義・地方分権的な教育制度観の導入を目指していたとされている³。

教育令における道德教育で特徴的なのは、学制において「修身口授」とされていた修身の名称がはじめて「修身」と名を変え、以降同一の名称で続いていくことにある。また、この時小学校においては修身科が主要6教科に加えられている⁴。

改正教育令

教育令によって学制以降の教育内容は大きく変化したが、それによる混乱も大きかった。また、同時期に起きた自由民権運動の高まりも、政府としては無視できぬものであった。そのため、1880年（明治13年）12月に、改正教育令が出されることとなった。

改正教育令は自由主義的、地方分権的な性格が抑えられ、就学の義務強化といった教育内容の改訂によって中央集権化に即した性格を有した。その中で、道德の強化はこれらの問題に対する有効な手段とされ、修身は小学校教科の中でも最上位に位置づけられ、時数も増加した。さらにこの時期、道德教育に対する論争や、天皇の意向をまとめた「教学聖旨」なども登場し、道德教育の混乱があったが、それについては後の節でまとめたい。

各学校令の制定

1885年（明治18年）、森有礼が初代文部大臣に就任し、儒教主義的な徳育に対して国家主義的な教育を行うことで近代国家を担うことのできる国民を養成しようとした。翌1886年（明治19年）から小学校令、中学校令、師範学校令をはじめとする各学校令が公布されていった。各学校令の中では日常生活における人と人との相互関係を重視し、人倫を基礎とした道德教育が提唱されていたとされている⁵。

このように、森文相期において、修身を中心とした教育制度が一度は方向転換を見た。しかし、1889年（明治22年）の森有礼暗殺と、その後の元田を中心とした儒学派の台頭により、学校令の施行時期にきて儒教的な色彩が復活している。小学校令は改正され、最終的に教育勅語起草後に、修身科へのやり戻しが起き、それは最終的に太平洋戦争終結まで変わること無く続くこととなる。

教育勅語と学校令改正

1890年（明治23年）、天皇による国の教育の根本方針として「教育ニ関スル勅語」が發布された。これにより、道德教育の大きな部分が規定され、それにとまなう教科「修身」の方向も決定的となった。教育勅語は主に「教育ノ淵源」、「国体ノ精華」、「臣民」の守るべ

き徳目について述べられており、天皇を中心とした国家を支えるよう示されている。

教育勅語発布直前に改正された小学校令には、教科「修身」において「教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ」との文面が示されており、教育勅語の重視と、それに伴う教師の口授という形からの脱却が見られる。

国定教科書改訂

戦前において、修身の名称や理念は基本的には変わることではなかったが、時代背景にあわせて五期の国定教科書が出され、教授内容が変化していった。初期における内容は主として殖産興業や職業倫理といった国家の発展に関する時代背景を反映しているのに対し、小学校令が国民学校令に改められ、教育統制が強くなった第五期などは軍国主義的な色彩を強く帯びるものとなった。

戦後修身科廃止と社会科導入

戦後、教育勅語を中心とした修身科による道德教育はGHQにより停止され、1947年（昭和22年）には教育の理念、目標を規定する「教育基本法」が公布され、その理念を具体的に示した「学校教育法」も公布されることとなった。

これらは占領政策を主導した米国の方針により、超国家主義的・軍国主義的な思想を撤廃することが求められた結果であり、修身はその後再開されることはなかった。代わって新しく1948年（昭和23年）に作成された「学習指導要領一般編」では、修身科の廃止とそれに代わる社会科の導入が図られる。そこでは、「これまでの修身・公民・地理・歴史などの教科の内容を融合」⁶したものであるとして社会科が取り扱われている。

「道德」の時間設置

1958年（昭和33年）8月、「学校教育法施行規則」の一部改正され、道德が教育課程の一領域として取り扱われることとなった。その後、「学習指導要領道德編」が告示され、「道德」の時間が始まることとなった。道德の時間において取り扱われる内容は、その後の学習指導要領の改訂に即して変化していき今日に至る。

以上、学校教育における道德教育の流れを、今日研究されている範囲で概説的に取り扱ってきた。戦前における道德教育は、教育勅語の成立前後で大きく分かれるであろうし、戦後、教育勅語が効力を失った後は、道德の時間が今日に続くまで道德教育の一翼を担ってきたと考えられる。

森有礼の求めた道德教育を探る場合、彼の活躍の位置づけは教育勅語発布以前となる。それは、教育勅語によって推進され、戦後統治によって否定された修身教育が根本的に成立する前の時代の徳育である。そのため、教育勅語を挟んだ今日的な内容との比較や、その意義を追及しなければならないという課題も存在するが、これについては他日を期して研究したい。本節のねらいは森有礼の道德教育に対する歴史的な位置づけの再確認であり、次節以降で行う彼の徳育に対する政策や、他の政策との関連についての再考を助けるものである。以上の点を考察として、次節につなげたい。

第二節 明治期前半から中盤にかけての徳育

前節では森有礼の徳育政策が教育勅語煥発前の時期に位置づけられることを確認した。本節では、それを受け、学制成立から学校令の改正に至る時期の道德教育制度について、史料を基に考察していきたい。

なお、どこまでを道德教育とするかについては倫理学や哲学の分野での指摘もあると考えられるが、その論議は別の機会に回すこととし、ここでは制度的な連続性から道德教育とみなされるものに焦点を当てて論じることとする。

学制（小学教則・修身科）

学制における道德教育の規定は、修身科の設置に見ることができる。学制に記された各学校における教科の設置は以下の通りである。（以降、引用史料の下線、および一部の読点は筆者による）

【小学校教育】

〔下等小学校〕綴字、習字、單語、會話、讀本、修身、書牘、文法、算術、養生法、地學大意、理學大意、體術、唱歌（学制第二七章下等小学教科⁷⁾）

〔上等小学校〕綴字、習字、單語、會話、讀本、修身、書牘、文法、算術、養生法、地學大意、理學大意、體術、唱歌、史學大意、幾何學野畫大意、博物學大意、化學大意、外國語學ノ一⁸⁾、記簿法、畫學、天球學（学制第二七章上等小学教科⁹⁾）

【中学校教育】

〔下等中学校〕國語學、數學、習字、地學、史學、外國語學、理學、畫學、古言學、幾何學、記簿法、博物學、化學、修身學、測量學、奏樂（学制第二九章下等中学教科¹⁰⁾、

〔上等中学校〕國語學、數學、習字、外國語學、理學、野畫、古言學、幾何代數學、記簿法、化學、修身學、測量學、經濟學、重學、動植地質鑛山學（学制第二九章上等中学教科¹¹⁾）

このように、小学校、中学校で一貫して修身を教授することが定められたことが分かる。順序的には、江戸時代から重視されてきた綴字や国語が筆頭となっているのに対し、修身は中盤から後半に位置している。また、後に制定される教育令、改正教育令、学校令の時数と比べても少ないことから、他の教科に比較して修身が軽視されていたとの見解ができるとされている。

なお、師範教育については整備が不十分で教科について確たるものが示されておらず、大学における道德教育の規定は見当たらない。

教育令・改正教育令

教育令には小学校以外の学科について規定するものはなく、改正教育令においても小学校の学科のみが修正されている。小学校における初等、中等、高等の各段階の学科と、中学校の学科については、1881年（明治14年）に出された各学校の教則綱領、教則大綱によって規定されている。

【教育令：小学校教育】

讀書，習字，算術，地理，歴史，修身，野畫¹²，唱歌，體操，物理，生理，博物，裁縫（教育令第三條¹³）

【改正教育令：小学校教育】

修身，讀書，習字，算術，地理，歴史，野畫¹⁴，唱歌，體操，物理，生理，博物，裁縫（改正教育令第三條¹⁵）

【小学校教則綱領】

〔小学校初等科〕修身，讀書，習字，算術，唱歌¹⁶，體操（小学校教則綱領第一章第二條¹⁷）

〔小学校中等科〕修身，讀書，習字，算術，唱歌，體操，歴史，圖畫，博物，物理，裁縫¹⁸（小学校教則綱領第一章第三條¹⁹）

〔小学校高等科〕修身，讀書，習字，算術，地理，圖畫，博物，唱歌，體操，裁縫，化學，生理，幾何，經濟（小学校教則綱領第一章第四條²⁰）

【中学校教則大綱】

〔初等中学校〕修身，和漢文，英語，算術，代數，幾何，地理，歴史，生理，動物，植物，物理，化學，經濟，記簿，習字，圖畫，唱歌，體操（中学校教則大綱第三條²¹）

〔高等中学校〕修身，和漢文，英語，記簿，圖畫，唱歌，體操，三角法，金石，本邦法令，物理，化學（中学校教則大綱第四條²²）

【師範学校教則大綱】

〔初等師範学校〕修身，讀書，習字，算術，地理，物理，教育學學校管理法，實地授業，唱歌，體操（師範学校教則大綱第三條²³）

〔中等師範学校〕修身，讀書，習字，算術，地理，歴史，圖畫，生理，博物，物理，化學，幾何，記簿，教育學學校管理法，實地授業，唱歌，體操（師範学校教則大綱第四條²⁴）

〔高等師範学校〕修身，讀書，習字，算術，地理，歴史，圖畫，生理，博物，物理，化學，幾何，代數，經濟，記簿，本邦法令，心理，教育學學校管理法，實地授業，唱歌，體操（師範学校教則大綱第五條²⁵）

このように、教育令によって修身科は主要教科の仲間入りを果たし、改正教育令に伴う諸規定により、各教科の中でも最重要なものとなった。また、小学校、中学校だけでなく、師範学校における科目にも取り入れられ、初等、中等教育の中でも最上位の位置をゆるぎなく占めるものへと変わっていったことが分かる。

諸学校令

1886年（明治19年）の諸学校令における道德教育の規定は、小学校を除いて「修身」を「倫理」に変更している点が特徴的である。各学校令に記された教科の設置は以下の通りである。

【小学校令】

〔尋常小学校〕修身，讀書，作文，習字，算術，體操，圖畫²⁶，唱歌（小学校令第十二條に基づく文部省令第八號「小學校ノ學科及其程度」第二條²⁷）

〔高等小学校〕修身、読書、作文、習字、算術、地理、歴史、理科、圖畫、唱歌、體操、裁縫²⁸、(小学校令第十二條に基づく文部省令第八號「小學校ノ學科及其程度」第三條²⁸)

【中学校令】

〔尋常中学校〕倫理、國語、漢文、²⁹第一外國語、第二外國語、農業、地理、歴史、數學、博物、物理、化學、習字、圖畫、唱歌、體操(中学校令第七條に基づく文部省令第十四號「尋常中學校ノ學科及其程度」第一條³⁰)

〔高等中学校〕國語、漢文、第一外國語、第二外國語、羅甸語、地理、歴史、數學、動物植物、地質鑛物、物理、科学、天文、理財學、哲學、圖畫、力學、測量、體操(中学校令第七條に基づく文部省令第十六號「高等中學校ノ學科及其程度」第一條³¹)

【師範学校令】

〔尋常師範学校〕倫理、教育、國語、漢文、英語、數學、地理歴史、博物、物理化學、農業手工、家事、習字圖畫、音樂、體操(師範学校令第十二條に基づく文部省令第九號「尋常師範學校ノ學科及其程度」第一條³²)

〔高等師範学校：理化學科〕教育學、倫理學、英語、數學、物理學、化學、手工、圖畫、音樂、體操(師範学校令第十二條に基づく文部省令第十七號「高等師範學校ノ學科及其程度」第三條³³)

〔高等師範学校：博物學科〕教育學、倫理學、英語、有機化學、鑛物學、地質學、植物學、動物學、生理學、農業、圖畫、音樂、體操(師範学校令第十二條に基づく文部省令第十七號「高等師範學校ノ學科及其程度」第四條³⁴)

〔高等師範学校：文學科〕教育學、倫理學、國語、漢文、英語、地理歴史、理財學、哲學、音樂、體操(師範学校令第十二條に基づく文部省令第十七號「高等師範學校ノ學科及其程度」第五條³⁵)

このように、森有礼の登場により制定された学校令では、初等教育での修身はそのままに、中等教育と師範教育での「倫理」が導入されたことが分かる。また、高等師範学校では教授方法まで幅広く含めた「倫理学」が扱われてもいる。その理念については次節で述べるとして、修身で統一されていた道德教育に、一石を投じたことは確かであることが確認できるであろう。

学校令改正

森の死後、各学校令は改正され、道德教育に関する規定も順次変更されている。部分的な改正は小学校令が翌1890年(明治23年)に、中学校令は1891年(明治24年)に早くも行われているが、このときは主な名称を据え置くなど小さな改正であった。教科内容などに関する抜本的な転換は、明治30年代のことである。

小学校令は1900年(明治33年)に「小学校令改正」³⁶と改められ、中学校令1899年(明治32年)に「中学校令改正」³⁷とされた。また、師範学校令は1897年(明治30年)に「師範教育令」となった。ここで道德教育がどのように変化したのかを見ると、以下のようになる。

【小学校令改正】

〔尋常小学校〕修身、國語、算術、體操、圖畫³⁸、唱歌、手工、裁縫（小学校令第十九條³⁹）
 〔高等小学校〕修身、國語、算術、日本歴史、地理、外國地理、理科、圖畫、唱歌、體操、裁縫、手工⁴⁰、農業、商業、英語（小学校令第二十條⁴¹）

【中学校令改正】

修身、國語及漢文、外國語、歴史、地理、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、圖畫、唱歌、體操（中学校令改正に基く中学校施行規則第一章第一條⁴²）

一見して分かるように、それまで「倫理」、「倫理学」とされた内容が、全て「修身」に戻っている。また、次節で詳しく述べるが、教授内容に関しても再度の大きな変革を強いられることとなった。また、師範教育令を受けた直後の倫理科の消滅はなかったが、1907年（明治40年）の師範学校規定（抄）によって、全て「修身」に変わる。ただし、森有礼の活躍した時代の全後半を踏まえて明治期前半から中盤と区切った手前、ここでの言及については省略する。

明治期の道德教育思想

これまでは、順を追って明治前半期の道德教育を制度面からまとめてみた。最後に、これら制度を改変させていった政治家、思想家たちの主張や論争について取り上げ、背景の説明としたい。

まず、学制が公布された1872年（明治5年）前後は、教育そのものについて活発に議論がなされた時期でもある。文部省成立に関する省内の動きはもちろんのこと、森有礼や福沢諭吉らが参加した明六社の啓蒙活動は大きな役割を果たしたといえる。特に福沢諭吉は『学問のすゝめ』をはじめとする数多くの啓蒙を行い、影響を与えた。しかし、これらの特徴は啓蒙活動に終始していたことにもあり、具体的な道德教育の方法論に関しては、概して低調であったとされる。

明治10年代に入ると自由民権運動の活発化とともに、自由教育令という形で教育制度が変革したが、同時期に「教学聖旨」が、明治天皇によって出されたことは道德教育を含めた教育に関する論争の契機となった。「教学聖旨」は明治天皇が1878年（明治11年）に各地を視察して学校教育についての意向を示したものを、侍講元田永孚がまとめたもので、学制の開化主義を批判し、孔孟の教えを主とした仁義忠孝の精神を養う一方で、高度な理論よりも実学を求めるべきであるという内容であった。これに対し内務卿伊藤博文は「教育議」をもって反論したが、伊藤の論に反論する形で元田の「教育議付議」が出された。このような中で育まれた徳育重視の風潮は、教育令、改正教育令の中の修身重視という形で現れている。

森有礼が文部行政の中枢に上がり、学校令をはじめとする改革を行う段に至っては、彼の主張する儒教主義的な徳育の抑制と、国家主義的な国民教育制度の導入が、議論の的となった。森に対して元田は数々の批判を展開したほか、従来からの徳育論争自体も活発化し、混乱を招く結果となった。これらの徳育論争が生じた原因は、徳育の重視が提唱された後、その基本思想は何かという点で多様な意見が出たことにあるとされている⁴³。

森有礼の死後、文部大臣芳川顕正らの下で起草された教育勅語は、天皇個人の教育理念

を国民に表明する形が取られており、政治上の勅令、勅語とは区別されて扱われた。教育勅語はその後の学校教育の根本理念となり、道德教育を担う修身科では、教育勅語に基いた教授がなされるようになった。

以上、明治前半の各時期における道德教育思想を表すものをまとめた。一番大きなものはやはり教育勅語であろうが、時代背景を受けて様々な変遷をたどっていたことが分かる。現代事象としても学力論争が知育偏重とゆとりや心の教育といった狭間でやり戻しが起こっているように、この当時も大きなやり戻しが存在していたことが分かる。

これらの時代背景を踏まえ、最終的に森有礼の德育政策について、その具体的な考察を次節で行いたい。

第三節 森有礼の德育政策

森有礼の德育行政

森有礼は若いころから英米に留学し、英米における外交官として活躍した開明的な人物である。また、国家主義的、かつ合理主義的な精神をもって、明六社を主導し、啓蒙活動を担うなど、教育に対する関心の高い人物であった。彼は、欧米市民社会を範として、教育を国家富強の支柱として捉え、近代国家を担う人材の育成を掲げていたとされている⁴⁴。そのため、森有礼の德育観も、旧来の儒教を中心とした内容をよしとせず、教授内容の明確化と、近代社会の倫理を基礎とした道德教育という面から展開していった。

この観点に基き、森有礼が示した諸学校令について、その性質を比較してみたい。

【小学校：修身】

〔改正教育令〕修身 初等科ニ於テハ主トシテ簡易ノ格言、事實等ニ就キ中等科及高等科ニ於テハ主トシテ稍高尚ノ格言、事實等ニ就キテ兒童ノ徳性ヲ涵養スヘシ又兼テ作法ヲ授ケンコトヲ要ス（小学校教則綱領第三章第十條⁴⁵）

〔小学校令〕修身 小學校ニ於テハ内外古今人士ノ善良ノ言行ニ就キ兒童ニ適切ニシテ且理會シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話シ日常ノ作法ヲ教ヘ教員身自ラ言行ノ規範トナリ兒童ヲシテ善ク之ニ習ハシムルヲ以テ專要トス（小学校令第十二條に基づく文部省令第八號「小學校ノ學科及其程度」第十條⁴⁶）

小学校令以前においては儒教的な「格言」を取り扱うという内容だったものを、具体的な「古今人士の善良の言行」という項目を設置した上で、口授する方法を規定している。これと同時期に、森は仁義忠孝を基本にする修身教科書を差し止める⁴⁷など、この方針を徹底している。

また、中学校令と師範学校令における德育は、それまでの「修身」から「倫理」に移ったが、その教科程度を見ると以下ようになる。

【中学校：修身・倫理】

〔中学校令〕倫理 人倫道德ノ要旨（師範学校令第十二條に基づく文部省令第九號「尋常師範學校ノ學科及其程度」第五條⁴⁸）

【師範学校】

〔師範学校令〕尋常師範学校 倫理 人倫道德ノ要旨（師範学校令第十二條に基づく文部省令第九號「尋常師範學校ノ學科及其程度」第一條⁴⁹⁾）

高等師範学校：理化學科 倫理學 教育汎論，教授汎論，教授各論，教育史，批評及實地練習，人倫道德ノ要旨（師範学校令第十二條に基づく文部省令第十七號「高等師範學校ノ學科及其程度」第三條⁵⁰⁾）

高等師範学校：博物學科 倫理學 教育汎論，教授汎論，教授各論，教育史，批評及實地練習，人倫道德ノ要旨（師範学校令第十二條に基づく文部省令第十七號「高等師範學校ノ學科及其程度」第四條⁵¹⁾）

高等師範学校：文學科 倫理學 教育汎論，教授汎論，教授各論，教育史，批評及實地練習，人倫道德ノ要旨（師範学校令第十二條に基づく文部省令第十七號「高等師範學校ノ學科及其程度」第五條⁵²⁾）

ここで見られる教科内容からは、近代社会の倫理を基礎として徳育を成り立たせようという意図が見て取れる。政教分離を主張し、「自他並立」の考えを持つ森だからこそ、高邁空虚な修身を遠ざけ、倫理科を導入したのではないだろうか。

徳育における森の評価

こういった森の政策は、同時代人たちにどの様に移ったのであろうか。

「教学聖旨」「教育勅語」を起草し、修身教育に重きをなした元田永孚は、森有礼のことをキリスト教徒と確信し、一国の文部大臣として不相応であると糾弾し続けた。元田の見解では、森の政策は旧来の日本の道德教育を無視し、西洋の方法を急進的に輸入した時流に適合しないものであったということになる。

なお、森有礼の人物研究の観点では、森の国家主義が、国民に求めた徳育は、天皇個人ではなく、国家そのものの焦点を当てており、忠誠心や愛国心の対象も国家であったと考察されている。これは、皇統の伝統や国民の愛着に焦点を当てる元田らその後の修身推進者と異なるといった分析である。

森有礼の元で倫理科の教科書『倫理書』を編纂し、後に「徳育鎮定論」を著した能勢栄は、森の道德教育は宗教にも依らず、哲学にも依らず、人間同士の関係を見据えて行動の理念を講究したものであると評価している。この森の道德観は、同書で出てくる「自他並立」の精神として注目できるものである。森有礼の評価については、彼の合理的な精神を反映したかのように、大きく評価が割れるところであるが、徳育に関しても例外なく、その評価が割れていることが確認できる。

結局のところ、森の政策の是非は、これ以上強くは語られることがなかった。その理由は、森有礼の改革が速やかに終了し、同じベクトルでこれを引き継ぐものが現れなかったからに他ならない。

森有礼の徳育行政の顛末は、前節にあったとおりである。森は大日本帝国憲法発布当日に、暗殺者の凶刃に倒れ、改革は半ばで頓挫した。結果、森の死後わずか1、2年で各学校令は中改正を見ることとなり、次の改正以降、彼の導入した「倫理」および「倫理学」

はその理念もろとも消えたのである。

道德通史による森の存在確認は上記の通りである。今日に至る過程で、森の道德政策は行政を動かしたものの、その継続を失って消滅することとなった。また、森の行った改革のゆり戻しとして、教育勅語の成立へと一点収束したものとも考えられる。

これらの通史には、今の時点で疑う余地はなく、これをもって本章のまとめとしたい。ここでのまとめを受けて、次章では、森有礼個人に対する人物研究の観点から、彼の求めた徳育について考察していく。公の性格と個の性格といった二種類の考察を交錯させることで、多少は森有礼像を立体的に構成できるのではないだろうか。

第二章 史料の分析

第一節 史料の位置づけ

第二章では、森有礼自身が文相時に示した行動や理念を、史料を元に整理・再考したい。ここで扱うのは、以下の三項目についての史料である。史料は必要に応じて提示し、全ての表記は原文にできるだけ忠実なものとする。

文部省編纂教科書『倫理書』

1888年（明治21年）に出された『倫理書』は、森有礼が教育行政に対して道德教育を前面に出したものである。この書は森の監修の下、文部省から発行されたものであり、思想的にはH. Spencerとの関わりが指摘されている⁵³。倫理書の存在は森の求める道德教育像を示す働きを示したと考えられるが、倫理科の廃止と修身科の復活により、その存在は継続することがなかった。

各学校における演説

『倫理書』が編纂される以前から、森は各学校を視察して学校令における理念や目的について演説している。過去、学制制定時に明六社で啓蒙活動を行ったように、森は文部大臣就任前後から、各学校や自治体において第二の啓蒙活動とも呼べる行動を起こしている。このことは、森の行動力や合理主義を現すよい資料ともなっている。ここでは1887年（明治20年）に小学校の修身について触れた「九州各縣巡回の途次小學校における示諭」を取り扱いたい。

兵式体操に関する資料

森有礼が文相期に行った政策の一つとして、兵式体操の導入がある。兵式体操の形式は、隊列運動を中心とした軍隊式のものであったが、森はそこで求める内容に精神的な涵養の項目を挙げている。つまり、身体を扱うことを通じて、その目的となる精神の統制を求めるという方法を求めたのである。これについては、多くの先行研究があるが、1879年（明治12年）の導入前段階となった「教育論－身体能力」と、1887年（明治20年）の上奏文「兵式体操に関する建言案」について取り扱いたい。

第二節 史料の分析

本節では、第一節に示した順に史料を分析し、倫理書に至る過程を明確にしていく。史料を並べ替えると以下ようになる。

- 『倫理書』
- 「九州各縣巡回の途次小學校における示諭」
- 「教育論－身體の能力」
- 「兵式體操に關する建言案」

まず、『倫理書』序文の「凡例」には以下のように示されている。

「一 此書ニ由テ倫理ヲ教フルハ、專ラ人ノ、人ニ對シテ起ル所ノ情ノ、發シテ行爲トナル者ニ就キ、其正邪善惡ヲ判斷スルニ足ルベキ標準ヲ明示スルニ在リ、而シテ人ノ、物ニ對シテ起ル所ノ情ノ、發シテ行爲トナル者ニ就テハ、此書ニ直接ノ關係ヲ有セズト雖モ、此書ニ就テ、倫理ヲ教フルニ際リ、間接ノ關係ヲ有スル者ノ如キハ、教師、之ニ論及シテ可ナリ。

一 道德ヲ教フルノ法ハ、人ノ心裏ニ、正邪善惡ノ別ルハ所ヲ説キ、人ヲシテ、正善ニ就キ、邪惡ヲ避ケシメ、而シテ初ブノ者ニハ專ラ實例ヲ舉ゲテ、其心ニ感動セシメ、以テ其行爲ヲシテ、正善ノ慣習ヲ得セシムルニ在リ。故ニ其主トスル所ハ、思想、未ダ定マラズ、性質、未ダ熟セザル者ヲ誘掖スル過ニギズ。

一 道德ノ、倫理ニ於ケル關係ハ、密ナルト雖モ、其間、自ラ原理ト法則トノ區別アリ。倫理ハ、原理ニシテ、道德ハ、法則ナリトスルヲ得ベシ。而シテ此書ハ、道德教育ノ法ヲ主トスル者ニ非ズシテ、單ニ倫理ノ標準ヲ明ニスルニ在リ。

一 此書ニ云ヘル道理トハ、吾人普通ノ感覺ニ於テ、道理ト認ムル所ノ者ヲ云フ。而シテ此解釋ハ、未ダ精確ナラザルモ、本書ノ目的ヲ達スルニ足ル者トス。何トナレバ、倫理的眞理ハ、概テ此普通感覺ニ於テ、道理トスル所ノ者ニ、一致スル者ナレバナリ。

一 此書ハ專ラ倫理ノ要領ヲ記スル者ニシテ、廣ク例ヲ舉ゲ、詳ニ證ヲ示スハ、教師ノ任トシテ、之ヲ略セリ。而シテ其要領ハ、初學ノ用ニ供スルニ足ル所ノ區域ニ止メタリ。自他並立ノ進行、及發達、竝ニ倫理ノ蘊奧ヲ極メント欲スル者ハ、須ク高尚ナル哲學ニ就テ講究スベシ。⁵⁴

倫理科の要領で示した内容を、ここで緻密に構成していることが分かる。森の主張する「倫理」および「倫理学」は、道德の原理であって具体的な行動ではない。人の行為の起源を明確にし、あるべき行為とは何かを示しても、具体的なあり方の教授は各教師に委ねられている。絶対的な基準としての固定的な事象や高邁な格言ではなく、誰もが認める原理として倫理を示そうとした森の姿勢が伺える。

次に、「九州各縣巡回の途次小學校における示諭」には、教科「修身」に対して以下のくだりがある。

「兒童の發育の度合如何を辨へず、徒らに古人言行の漠然として六ヶ敷ことを授るは甚不可（中略）世間往々論語などを用ゐるものあり、該書の如きは修身書と言はんよりは寧ろ政事書と言うの穩當なるに如かさるに似たり（中略）要するに今日の修身科書は總て瑕瑾なきを免かれざるを以て教員の注意最も緊要なり」⁵⁵

ここでは修身科における既存の教科書を批判し、儒教に偏った教育を否定している。これは、修身の必要性をある程度認めた上で、孔子の教えを高邁にした後の儒学者たちを批判し、「政事書」に過ぎないと断言しているのである。政治・宗教色を帯びてしまった儒教からの脱却として、森有礼が求めたのが、二章に示したとおり「兒童ニ適切ニシテ且理會シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話」して、「日常ノ作法ヲ教ヘ教員身自ラ言行ノ規範」となることであった。

ここまでは、倫理に関する考察である。次に、同時期に森が展開した体育政策である兵式体操について、徳育の面に絡めて考察したい。まず、「教育論―身體の能力」の中には以下のくだりがある。

「蓋シ身體ノ能力ハ、（既ニ前文ニ述ヘシ如ク）、人生至重タル三徳ノ一ニシテ、其職トスル所ハ、則人ノ善ヲ行フニ方リテ、其能力ヲ助ケ成スニ在リ、而シテ此力ハ獨身體ノ健康上ヨリ來ルノミノ者ニ非ス、敢為ノ勇氣モ亦之ニ加ハラサレハ完全ナルヲ得ス」⁵⁶

全文の中では、身体能力を向上させることが重要であると説いているが、上記の部分では健康的（≡肉体的）な向上だけでなく、精神上的の資質として身体を動かす「敢為ノ勇氣」の向上が不可欠であると説いている。当時は体操と呼ばれた体育の内容に関して、行動の起源である道徳的な項目に着目していたことが分かる。

最後に、上記の「教育論」の後に上奏された「兵式體操に關する建言案」には以下のくだりがある。

「教育ノ要タル智育徳育體育ノ三者ヲシテ齎シク發達セシムルコト（中略）本邦維新以來日猶ホ淺ク百般ノ文物皆歐米ニ取り智育ノ急ナル未タ今日ノ如キヲ見サルナリ、是ニ於テカ徳育體育ノ二者勢ヒ其歩ヲ譲ラサルヲ得サルニ至レリ」⁵⁷

知育徳育體育の三要素の發達を教育の要と示しつつも、欧米の影響を受けた知育は別として、徳育と體育の二者は不十分である。教育の達成のためにもこの二要素の充実が必要であり、その方法として兵式体操を導入するというのが森の持論であった。ここでの兵式体操は、倫理科の教科目的にも示されているように、「行為」を身体の動きと見立て、これを具体化するために必要な精神を涵養させるものとして、徳育を向上させるという構図を成り立たせるに足るものであると考えられる。

以上、森の徳育政策に現れた特徴との関連から、史料を抽出して論じてみた。これにより、同時期の森の行動や主張、あるいは他の政策などとの関連がある程度見出せたのではないかと考えられる。

結言

森有礼が求めた倫理は、今日の教科にその痕跡を残してはいない。しかし、森の德育観を反映したこれらの政策が、彼の死後に展開した修身科と趣を異にしていたことは明らかである。考え方を変えれば、森有礼の倫理を否定する形で、教育勅語をはじめとする一連の德育政策が展開していったと見ることができる。

このことは、修身科が戦後否定され、その代わりとなるべく社会科、道徳の時間が設置されたことと矛盾しない。米国主導の教育改革を受け入れざるを得なかったことは歴史の必然である。しかし、教育基本法の改正が議論され、愛国心やアイデンティティといった内容が取り上げられる上で、日本における、学校教育黎明期のこれら德育が再考されるべきではないかと考えられてならない。これらは、決して天皇制国家を象徴するものではなく、少なくとも日本人が主体的に議論、取捨選択した上で導入されたものの一つであることは事実である。

今回の考察では、歴史研究を行う上での筆者の力不足が明白になったと考えている。拙い史料収集と分析の結果、扱いきれなかった史料も多数あるため、今後德育論をまとめる際に是非に補完したい。また、既に第一章で述べたように、修身科の存在前後にあるものの比較についても他日を期したいと考えている。教育勅語の前に森有礼が倫理科を中心に目指した道徳教育と、修身科が廃止された後の道徳教育との関連は、森有礼の教育論の意義を更に大きく膨らませることであろう。本研究が、最終的には森有礼の德育論に収束するものの足がかりになることを期待して、今後の研究をすすめていくこととする。

今回までに体育と德育については最低限触れてきたが、残る知育論についての基礎構築に関しては、既に多くの研究がなされている明六雑誌や『Education in Japan』といった項目はもちろんのこと、今回の史料でも扱った各学校における演説史料の大幅な収集・再考を行うことで、足がかりとなるものを作成したいと考えている。

最後に、本論文を執筆するにあたり、数々のご教示を頂いた森下恭光教授、甲斐規雄教授をはじめとする先生方、よき相談相手となっていたいただいた学友諸兄に対し、心よりの感謝の思いをここに示し、結言とさせていただきます。

- 1 森下恭光・佐々井利夫共著『道徳教育の研究』明星大学出版部 2002 p. 73
- 2 梅根悟監修『道徳教育史Ⅱ』講談社 1977 p. 85
- 3 前掲書『道徳教育の研究』p. 76
- 4 前掲書『道徳教育史Ⅱ』p. 123
- 5 安里彦紀『近代日本道徳教育史』高陵社 1967 p. 139
- 6 前掲書『道徳教育の研究』p. 88
- 7 教育史編纂會編『明治以降教育制度発達史』第一巻 龍吟社 1938 p. 283-4を参照。
- 8 「外国語學ノ一二、記簿法、畫學、天球學」については、地形等を斟酌して教授可能とされている。
- 9 前掲書『明治以降教育制度発達史』第一巻 p. 284を参照。
- 10 同前書 p. 285-6を参照。

- 11 同前書 p. 286-7を参照。
- 12 「読書, 習字, 算術, 地理, 歴史, 脩身」を主要教科とし, 「罫畫, 唱歌, 體操, 物理, 生理, 博物, 裁縫」については条件付で設置とされた。
- 13 教育史編纂會編『明治以降教育制度発達史』第二卷 龍吟社 1938 p. 162を参照。
- 14 同前書 p. 162を参照。
- 15 同前書 p. 201-2を参照。
- 16 「唱歌」については教授法が整うのを待つて導入することとされている。以降, 中学校, 師範学校に関しても同様である。
- 17 前掲書『明治以降教育制度発達史』第二卷 p. 252を参照。
- 18 「裁縫」は女子のために設置するとされる。
- 19 前掲書『明治以降教育制度発達史』第二卷 p. 252を参照。
- 20 同前書 p. 252を参照。
- 21 同前書 p. 282を参照。
- 22 同前書 p. 282を参照。
- 23 同前書 p. 442を参照。
- 24 同前書 p. 442を参照。
- 25 同前書 p. 442を参照。
- 26 「圖畫, 唱歌」については, 土地の状況によって教授可能とされている。
- 27 教育史編纂會編『明治以降教育制度発達史』第三卷 龍吟社 1938 p. 39を参照。
- 28 同前書 p. 39を参照。
- 29 第二外国語と農業のいずれかは欠くことができ, 唱歌は当分の間欠いてもよいとされた。
- 30 前掲書『明治以降教育制度発達史』第三卷 p. 156を参照。
- 31 同前書 p. 161を参照。
- 32 同前書 p. 497を参照。
- 33 同前書 p. 509を参照。
- 34 同前書 p. 509を参照。
- 35 同前書 p. 509を参照。
- 36 文部省『学制百年史』ぎょうせい 1972 p. 100なお, 文部省出版のこの書では明治20年代の改正を「中改正」と称している。
- 37 同前書 p. 32
- 38 「圖畫, 唱歌, 手工, 裁縫」については土地の状況により一科目を加えることが可とされた。
- 39 教育史編纂會編『明治以降教育制度発達史』第四卷 龍吟社 1938 p. 49を参照。
- 40 「手工, 農業, 商業, 英語」は修業年限2カ年以上各段階において, 唱歌の代わりに設置が可とされた。
- 41 前掲書『明治以降教育制度発達史』第四卷 p. 49を参照。
- 42 同前書 p. 179を参照。
- 43 前掲書『道德教育史Ⅱ』p. 159
- 44 前掲書『道德教育史Ⅱ』p. 158

- 45 前掲書『明治以降教育制度発達史』第二巻 p. 253より引用。
- 46 前掲書『明治以降教育制度発達史』第三巻 p. 40より引用。
- 47 前掲書『道德教育史Ⅱ』p. 158
- 48 前掲書『明治以降教育制度発達史』第三巻 p. 157より引用。
- 49 同前書 p. 497より引用。
- 50 同前書 p. 509より引用。
- 51 同前書 p. 509より引用。
- 52 同前書 p. 509より引用。
- 53 長谷川精一「森有礼の道德教育論」(『相愛女子短期大学研究論集』第47巻 2000 p. 122)
- 54 前掲書『新修森有礼全集』第二巻 pp. 279-280より引用。
- 55 同前書 p. 379より引用。
- 56 同前書 p. 137より引用。
- 57 同前書 p. 159より引用。